



Data

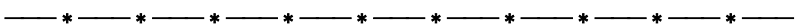
監督：アントン・コービン
 原作：ジョン・ル・カレ『誰よりも狙われた男』（早川書房刊）
 出演：フィリップ・シーモア・ホフマン/レイチェル・マクアダムス/グレゴリー・ドブリギン/ウィレム・デフォー/ロビン・ライト/ホムユン・エルシャディ/ニーナ・ホス/ダニエル・ブリュール/マハディ・ザハビ/ライナー・ボック

👁️👁️ みどころ

銃あり！格闘あり！カーアクションあり！昨今のハリウッドではそんなスパイ活劇が大流行だが、機密情報部（MI5）や秘密情報部（MI6）に所属していたジョン・ル・カレの原作にもとづくスパイものは、全く異質。

『寒い国から帰ってきたスパイ』（65年）は大昔のものとしても、『ナイロビの蜂』（05年）、『裏切りのサーカス』（11年）と続くシリアスなスパイたちの暗躍を、世界情勢をしっかりと勉強しながら堪能したい。

本作の舞台は、2001年に発生した9・11テロの首謀者たちが実行計画を立てたハンブルク。本作が最後の演技となった故フィリップ・シーモア・ホフマン率いるテロ対策班が見せる、「小魚→大魚→サメ作戦」とは？一見鮮やかなその展開に拍手だが、最後にとんでもない「どんでん返し」が待っていようとは・・・。



■□■この原作、この原作者に注目！■□■

日本では百田尚樹の『永遠の0』や『海賊とよばれた男』の売れ行きはすごいし、東野圭吾や湊かなえ、宮部みゆき等の原作はよく映画化されている。しかして、あなたは本作の原作となった『誰よりも狙われた男』とその原作者ジョン・ル・カレを知ってる？それを知らないとしても、スパイ映画の名作中の名作『寒い国から帰ってきたスパイ』（65年）の原作者と聞けば、すぐになるほど なるほど、とわかるはず。また、『ナイロビの蜂』（05年）（『シネマルーム11』285頁参照）、『裏切りのサーカス』（11年）（『シネマルーム28』114頁参照）の作者といえ、さらになるほど、と感心するはずだ。

『ナイロビの蜂』の評論で、「私は全然知らなかったが、この映画の原作『ナイロビの蜂』を書いたジョン・ル・カレは、自らイギリス外務省の一員として大使館等で仕事をした経験のある人物」と書いた。また、『裏切りのサーカス』の評論で「ジョン・ル・カレの原作が映画化されたのは、『寒い国から帰ったスパイ』や本作の他、『ナイロビの蜂』などたくさんあるそうだ。また、自らの経験を元に61年からスパイ小説を書き始めたジョン・ル・カレは、以来スパイ小説及びサスペンス界の巨匠として世界中に数多くの愛読者を持つらしい。そんな知識を吸収したうえ、久しぶりの、リアルな『スパイもの』に注目！」と書いた。

1931年生まれのイギリス人ジョン・ル・カレは大学で文学や法律を学んだ後に外務省に入り、機密情報部(MI5)や秘密情報部(MI6)に所属して旧西ドイツ・ボン英国大使館で二等書記官を務め、63年から2年にわたりハンブルクの領事を務めたというからすごい。

■□■本作のテーマは？主人公は？その任務は？■□■

日本では昔から直木賞や芥川賞などの権威ある賞があるうえ、近時は本屋大賞や女による女のためのR-18文学賞などたくさんの賞が増えてきた。そのため、乱立するボクシングのチャンピオン並みに、毎年たくさんの〇〇賞、△△賞の受賞作家が誕生するが、ホントに面白い小説、長年生き残る小説、2弾、3弾が書けるホンマモンの小説家は一体どれくらいいるの？それに比べるとジョン・ル・カレは、その経歴のみならず能力もピカイチだから、外務省での活動を元に1961年に作家活動を始めてからは、次々とリアルなスパイ小説でヒット作を連発できているわけだ。2008年に発表された本作の原作『誰よりも狙われた男』は、『寒い国から帰ってきたスパイ』当時の東西冷戦というわかりやすい構図ではなく、そのテーマは2001年の9.11テロ以降キーワードになった「イスラム過激派」を焦点として動く、混沌とした世界秩序を前提としたスパイたちの暗躍だ。しかして、本作の主人公は？そして、その任務は？

近時の最大の国際危機はエボラ出血熱。そして、国際情勢最大の焦点はイスラム国だが、イスラム国を語るについてもイスラム過激派がキーワード。しかして、本作冒頭、夕暮れどき。顔中ヒゲに覆われた、汚れたバックパック姿の若者が1人、あたかもこの都市を流れるエルベ川から浮かび上がってきたかのように突然姿を現し、他人に顔を見られないよう、フードをかぶり、俯きながら、街の浮浪者たちと共に波止場に沿って歩き続けるシーンが登場するが、この男こそ本作のストーリーの軸となるイスラム過激派の男イッサ・カルポフ(グレゴリー・ドブリギン)だ。こんなスタートからしてリアル！あなたも、最初から膝を乗り出すことまちがいない！

■□■なぜハンブルクが舞台に？9.11テロとの関連は？■□■

『リスボンに誘われて』（12年）（『シネマルーム33』10頁参照）では、ある偶然で実現した「リスボンへの旅」のストーリーと、1926年から1974年まで続いたポルトガルのアントニオ・デ・オリベイラ・サラザールの独裁政権下のリスボンで展開されたレジスタンス闘争の姿が描かれていたため、「リスボン」が重要な要素としてタイトルに使われていた。本作は、「ハンブルク」はタイトルにこそ使われていないが、ハンブルクを舞台としたギンター・バッハマン（フィリップ・シーモア・ホフマン）率いるテロ対策組織の活動を描いたものだ。『寒い国から帰ってきたスパイ』の舞台はベルリンだったが、なぜ、ハンブルクがそんなスパイたちが暗躍する映画の舞台になるの？

私も本作を観てはじめて知ったことだが、それは2001年に発生した9・11世界同時多発テロの首謀者たちが、このハンブルクに潜伏してテロの実行計画を練り上げたことが明らかになったため。つまり、ハンブルクで2度と同じようなテロの実行計画の立案が進行しないようにするために、ドイツのさまざまな諜報機関が日夜活動を続けているわけだ。ちなみに、ハンブルクはイギリス外務省に入った原作者ジョン・ル・カレが、1963年から2年にわたって領事を務めた場所。したがって、彼はハンブルクのまちを隅から隅までよく知っているわけだ。さらに、イッサのモデルとなったのは、アメリカ軍にテロ容疑の濡れ衣を着せられて拘束された、トルコ系ドイツ人のムラット・クルナズ氏だそう。そして、ジョン・ル・カレはこの彼との交流があったそうだし、原作の巻末では彼の弁護士ベルンハルド・ドッケ氏に感謝の意を表しているほどだから、本作の原作を書くのはお手のもの・・・。

■□■ハンブルクのまちの特徴は？■□■

私はドイツは西ドイツのフランクフルトしか行ったことがないので、ハンブルクのまちは全く知らない。しかし、パンフレットにある「PRODUCTION NOTES」によれば、『誰よりも狙われた男』は“ハンブルクの物語”でもある。この地は、歴史的な港町として、長い間ヨーロッパでもっとも裕福な海運業者たちが活躍してきた場所である。昔は貧しかった地域にも、現在では、上品な中産階級の家が立ち並ぶ時代になった。さらに何世紀にもわたって、特に近隣のトルコや北アフリカから、移民を受け入れてきた街でもある。」と書いているから、日本でいえばさしずめ横浜、神戸、堺のようなまち？

そんな「自由なまち」だったからこそ、9・11テロの首謀者たちが潜伏できたというのは何とも皮肉だ。しかし本作をみれば、その「裏返し」として、ハンブルクのまちでは、よそ者への不信が拡大していることがよくわかる。本作はスパイ映画だから、その面白さを存分に楽しみたいが、その前提として、なぜその舞台がハンブルクなのかについても、しっかり勉強しておきたい。

■□■バッハマンの狙いは？「小魚→大魚→サメ作戦」とは？■□■

各国にスパイ組織があることは当然。また、各スパイ組織の役割がそれぞれ決まってい

るのも当然。しかし、スパイといえども人間だから、役割分担や権限配分問題をめぐってそこに内輪モメや対立が生じるのは仕方ない。アメリカでも、CIAとFBIはよくケンカしている(?)が、本作に見る、ドイツ諜報部の目に止まらぬよう、公にならない仕事をするテロ対策班を率いるバッハマンと、ドイツの諜報機関である連邦憲法擁護庁(OPC)を率いるハンブルク支局長のディーター・モア(ライナー・ボック)は犬猿の仲らしい。ハンブルクにはこの2つの組織だけではなく、ドイツ海外諜報部もあり、その部長のミヒャエル・アクセルロットはバッハマンの旧友だ。さらに、アメリカのCIAはどこにでも支部があるようで、ハンブルクにはCIAの女性幹部マーサ・サリヴァン(ロビン・ライト)が節目節目で登場し、大きな役割を果たしている。さらに、ハンブルクにはインターポール(国際警察)もいる。

したがって、ハンブルクに潜入してきたイスラム過激派の男イッサをとらえた監視カメラを同じように認識しても、その対処法がそれぞれ違っていたのは仕方ない。大きな違いは、攻撃的で危険なイスラム戦士は即刻逮捕すべきと考えるマーサと、小魚を泳がせて大魚を釣り、さらにその大魚からサメを釣るという「サメの論理」の戦略を練るバッハマンとの違いだ。バッハマンが指揮するテロ対策班の諜報活動を見ていると、その大半が監視カメラと盗聴。戦後70年近くずっと平和を享受してきたノー天気な日本では、監視カメラ自体が人権侵害だとする意見が強く、盗聴などもっての外。しかし、バッハマンたちの仕事は、日夜監視カメラと盗聴で、他人の秘密を覗き込むことだ。

■□■事実関係を弁護士の的に整理すると・・・■□■

詳しいストーリーの紹介はできないが、ここで事実関係を弁護士の的に少しだけ整理しておきたい。バッハマンとその信頼する片腕の女性イルナ・フライ(ニーナ・ホス)、そしてチームのメンバーであるニキとマキシミアン(ダニエル・ブリュール)たちの諜報活動によって少しずつ明らかになっていくのは、次の事実だ。

すなわち、①イスラム過激派の青年イッサが人権団体サンクチュアリー・ノースに所属する、若く理想に燃える女性弁護士アナベル・リヒター(レイチェル・マクアダムス)の援助を受けて、ブルー・フレール銀行の頭取トミー・ブルー(ウィレム・デフォー)から巨額の父親の遺産を引き出そうとしていること、②イッサが引き出した金を、穏健なイスラム教徒の学者で慈善団体の資金調達係をしているファイサル・アブドゥラ博士(ホマユン・エルシャディ)に寄付をし、アブドゥラはその寄付金をイスラム過激派の各種テロ組織の資金として回そうとしていること、③したがって、小魚→大魚→サメの論理を貫徹するためには、アブドゥラから資金の送付先を書いた正確なメモをもらう必要があること、④すると、そのために必要なことは・・・?

『裏切りのサーカス』は結構複雑で難解なスパイ映画だったが、以上のようなバッハマンたちの活動を時系列に沿って描いていく本作は比較的わかりやすい。そして途中、モア

との衝突やマーサとの駆け引きがあるものの、バツハマンたちの情報収集活動は比較的順調に進んでいく。しかし、それって逆に、どこかに何かヤバイことがあるのでは・・・？

■この俳優に注目！なぜ彼がハリウッドの映画スターに？■

映画俳優はカッコいいもの。とりわけハリウッドの映画スターと言えば、昔のジョン・ウェインやジェームズ・ディーン等々から、現在のトム・クルーズ、ブラッド・ピット、レオナルド・ディカプリオ等々まで、カッコいいのが相場だ。ところが、日本にも渥美清のような例外がいたように、ハリウッドにもフィリップ・シーモア・ホフマンのような例外がいる。

アメリカではビジネスマンですら、肥満男は「自己管理ができていないだらしない男」と評価されるのに、なぜ腹の出っ張った中年男としか言いようのないフィリップが、『カーティ』(05年)、『シネマルーム11』(350頁参照)でアカデミー主演男優賞を受賞したり、ハリウッドを代表する人気映画スターになれたの？直近の『ハンガー・ゲーム2』(13年)、『シネマルーム32』(未掲載)はイマイチだったが、『ザ・マスター』(12年)でみせたホアキン・フェニックスとの「演技の激突」ぶりはお見事だった(『シネマルーム30』(213頁参照)。また、『ダウト—あるカトリック学校で—』(08年)、『シネマルーム22』(70頁参照)、『スーパー・チューズデー 正義を売った日』(11年)、『シネマルーム28』(126頁参照)等でも、フィリップの演技力が不可欠だった。

■フィリップの早すぎる死を悼む■

そんなフィリップが、本作ではまさに自分の持ち味ピッタリのバツハマン役を見事に演じている。しかし、それが彼の最後の演技になろうとは、誰も想像しなかったはずだ。そう、フィリップは2014年2月2日に死亡してしまったのだ。『エデンの東』(55年)、『理由なき反抗』(55年)、『ジャイアンツ』(56年)の3本だけの出演で24歳の若さで死んでしまったジェームズ・ディーンに比べれば、フィリップは多くの作品でさまざまな功績を遺したが、まだ46歳。今後の彼独特の活躍フィールドが想定されていただけに、実に残念だ。

もっとも、本作ではすべてのシーンでタバコを吸っていると言っても過言ではないほどのヘビースモーカーぶり。また、喫茶店でマーサと短い立ち話をするシーンでも、何とコーヒー(紅茶?)の中に持ち歩いてきたスキttl(ウイスキーボトル)のウイスキーを注ぐ始末。ベッドで考える事をしている時も、ちょっと起き出すとすぐにタバコ、ウイスキーだから、生活態度が不健康なことこの上ない。多分、バツハマンは仕事のスタイルが頑固一徹なのと同じように、酒、タバコを手放せない生活習慣も変えるつもりはないのだろうが、ひょっとしてそんな生活習慣がフィリップの若死にの原因・・・？いやいや、それはあくまで役柄のことだから、彼の実生活は・・・？

2014年7月17日付「The New York Times」誌にはフィリップの死を悼んだジョン・ル・カレの寄稿が掲載され、その原稿の最後を彼は「私たちはもう1人のフィリップを長い間待つことになるだろう」と結んだそうだが、フィリップの死亡によってジョン・ル・カレ原作の銃も格闘もカーアクションもない、本作的スパイ映画が消滅してしまわないことを期待したい。

■□■あなたは、バットマンのやり方の否定派？肯定派？■□■

テロ対策班を率いるバットマンの中盤からラストにかけての活躍ぶりを見て、バットマンに否定的な評価を下す人と、肯定的な評価を下す人は、ほぼ半分ずつに分かれるのではないかと私は思う。否定的な評価を下す人は、バットマンの身勝手さ、強引さ、平気でウソをつく体質、本心を明かさないう味さ、皮肉っぽい口の聞き方、等々がきつとイヤで鼻につくのだろう。それに対して、肯定的な評価を下す人は、それにもかかわらず、意外と誠実なところ、約束を守るところ、部下との信頼関係を完璧に作り上げているところ、等々をしっかり認めることができるためだ。

さまざまな目的をもって、さまざまに組織されたスパイたちの「暗躍戦」では、いつも成功ということはありません。実際は、きつと多くの失敗とちょっとした成功のくり返しだろう。場合によれば、組織を挙げての大失敗によって、組織壊滅の危機に瀕することだってあるはずだ。ちなみに、アーノルド・シュワルツェネッガー主演の『サボタージュ』（14年）は大活劇ながら、アガサ・クリスティの名作『そして誰もいなくなった』（39年）と同じ結末になる面白い映画だった（『シネマルーム33』157頁参照）。しかし本作中盤では、バットマン率いるテロ対策班が、かつてレバノンで行っていた大規模作戦の失敗によって、中東での拠点を失ったことが語られる。さらに、CIAの女性幹部マーサとの会話の中で、ひょっとしてこれはCIAの介入によるものかもしれないことが示唆される。それにもかかわらず、本作に見るバットマンの活動ぶりは危なっかしいから、どこかでほころびが・・・？

■□■「失敗は成功のもと」、のはずだが・・・■□■

もっとも、本作でテロ対策班が見せる、小魚（イッサ）→大魚（銀行家のブルーヤ穏健なイスラム教徒の学者のアブドゥラ）→サメ（イスラムのテロ組織の全容解明）作戦はCIAの監視下であり、かつ時間的に制約されているにもかかわらず、スクリーン上で観る限り順調そうに見える。小魚のイッサが身を寄せていたトルコ人女性レイラとその息子メリクのアパートにも身の危険が迫ったことを知ったアナベルの誘導下で、イッサの逮捕を狙うモアたちが突入する一歩手前で逃げ出すことができた。また、当初はバットマンたちの追及からも逃れていたイッサとアナベルも、バットマンはアナベルをうまく取り込むことによって、事実上イッサも作戦下に入れることができた。さらに、それは銀行家のブル

一も同じだったから、小魚→大魚→サメ作戦は順調そのものだ。

しかし、そんな展開をスクリーン上で観ながら私が心配したのは、その間モアは何をしているの？ということだ。モアがよほど間抜けな男ならバッハマンの思うように作戦が進んでいくのもわかるが、きっとそうではないはずだ。そんな私の心配どおり、本作の結末には「鳶に油揚げをさらわれる」ような、あっと驚くどんでん返しの展開が待っているので、それに注目！普通は「失敗は成功のもと」だから、バッハマンはレバノンでの失敗から何らかの教訓を得たはずだが・・・。

2014（平成26）年10月28日記



「誰よりも狙われた男」DVD&Blu-ray 好評発売中&レンタル中
発売・販売元:TCエンタテインメント (C) A Most Wanted Man Limited / Amusement Park Film GmbH